俳諧天尓波抄　二

へ 5
1865
2

俳諧天爾波抄 巻之二

○五属 下

○詠属 下

かな

歌にくては上古は。かなとのミよめり。中昔よりかなとよみ
まわりさわぐ中昔よりハかなて疑の辞。うるハ詠の辞とわかれ
こりて上古まてハ詠をも疑をもひとつにかなとよみ侍りしを。
すく疑といふもんの内なる所あるがゆへ。詠する句騒のみなれバ上
ちまこれをとゞひとつにかなといふもさる事なれバ。今はひ
とハみ玉ふ事はとんとしまし。このまゝにしときハ事肝要なりけれバなす
にもあれ。今するわが物がなるる不じく相敵しとるものあしく今まで
の埒とあてんとすれバ。かすこの取合。よのさしがなる不和あることをなぐさめ

ナゲクトハ歎息スルコトナリ 行下の疑属の かの係下をあそやらくんべし。あハ卅上ニアル あ二日

ジアハセテ心ウベシ さてこのかゝりに二例あり。靡の外。きの外といふ。靡の外と

いふは。「なつかしき」「こゆる」「見ゆる」「ゆくらむ」「いかにかなしき」など。あ

詞をしるをいふ。靡トハ匕父ガ装抄ニテノ目安ナリ きの外といふ。「心をやすくしらべて」

さがに「いやましくもえる涙のみか」など。わの字をもちていふ。されど此

二例ながらひとつにて。靡をもとむるが外の正例なるべくいふは。

をうちとむるものの上なりける例につゞくべき詞をあるも即ち此

らもまだまだ限ぞといふを「いやましくもえるか」限ぞといはん

なれども。シカラバ限リアルトモヨムベケレド。カク下上ニナスハフカキ理アルコトニテ。綱目ヲサトサンガ為ナリ。委シクハワガ言靈弁ニイヘリ されば

外も。たとひ物名をうけて「山ざくら」「ちらしなむ」「あしらふ」

「さくらばな」などいひても。その上にはあれども。その例にてつゞくべき詞もあるべき

事なり。されば物名くゝりてその外の間も。みなかくのごとし。信徳はいへり。

「サムイコトカナ」「面白イコトカナ」といふが即ち一つの例なり。されど此歌は

何の。ちけはじめなる係の字を。もとめて。いひくだして。これをうけたり

がら。上は例をもちあるべき詞なる歌をも知るべし。これ此歌の證も

とするべし。いにしへよりのみぞらなる事一つの例とおもふべき事也

とりてそれ連歌などにも此正例なる外のかゝりくるくしく言の外

のことばに上のちあひの例なるをもあり。歌よりこれぞすくなき

のそるれども。さもあらば。よくはいはずしく字数すくなきれども。正例にて

用ゐるはいはでかなはざるものも。さしてはひがしきあらば。又その字あひ

の詞かなふも字数すくなかりぬ。そのちあひの詞をそぶあるなり。

これを連俳にくもとくわく罪まあらず。歌にくわ係つぶ所例くゐも

よるかいかどの字数あるたにちらあるべき詞を要するく。その罪のがる

べうぞ。しくま歌一首三十一字の字数にて歌をなさとする時く

さればさまざまの品例をもいひてよりかくふかきを抄へん
ひとぐさにも用なきやうなれども、かのよの事は言はくきこえそれ
おのれの文はこそあしくもおもはれねど、かゝる名れども、いふまでも
詰(コトヅメ)なども、人々のよしあしくきこえむ事ぞすくなからむを、はぶきつゝ、おもふさまに
のみえ、のらず何にあしくまゐらせんとそれぞれさやうに品例をもいひて
すなはちなえ、此方は歌はくるしからねど、かくかくは引きて罪あかく書き
ほくさ罪をくいひがゝしくよしいふや、さうて又芭蕉翁の作とされる
桐一葉といふものは、うけがたしく今も古歌の品例など歴かの外を驚かせ
まつり。これはよるかく今の世まで俳諧者流を、うけがたくやな
しものまことなる。これいふもすなはち大くかゝる事かなるを、すなはち
うけたる句も皆みの上はかの古歌あひ詞をあゆみかたく多くをぶぞあまりも
多くあゆみて、そのつらゝあや句のあるまじきもあらば無下ずくの字をみえ

なり。されどこれは芭蕉翁のしわざにあらず。國學者とて知りはせん
何がしらのこれをみぬものと蕉翁の作へもれなかれど、ゑらむ者よみ
の徒をとつてあまたゞ、これは奪ふべくいつまで、文(アヤ)をつくいふ時とうやら
よく此歴の外をいはむとすれば、それぞれ人んあるへきもあるべく、おぼゆる
あく、よくよくよくしく俳諧を学ぶものはすくなからず、ものあれども、その品例乃
ごとく天尓波をとう時え、自然と読のこえる余やうかくなるかあくは、
このふれざりしかるべし。それといふはそくいふは発句で十七字にて
一そふなり。すなはち十七字にくるしみから、玉くるゝ所をいつのごとくつゞき時
え。一そふなぎ十七字なが、半のごとくなかるがゆゑに、いふもまた此浮か
くいふ発句をつくりわたるとて、ひとつを一首尾にかゝる首尾
にかゝる古歌のん所あるべし。それかやうにやうすに名づけしなりけることさる
わが今いふごとくなりで、ただ歴の外をうしなはしく嫌へとなすべ。

昔蕉翁自由の吐句は、「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」冬の日
かやうの類をつゞるまじきかとおもひしが、やはりこれ一句だちは、新しみが専らなり
うるはしからざりし。又つゞりのあらんでもいへるなるべし

○第一例 恋の部とす

猿　されどこそ（神田祭）ひなの拍子のあるかぎり　蚊足
日　汁ぢるの中へおりくらしこそ福の秋　土芳
春　花に埋もれて夢より直に死なん哉　越人
日　蝶の名も茶屋の杉をきられぬ　昌圭
炭　月あげ山て月夜を歩行哉　利牛
荒　茶の花をそのつぎにみなしかな　李晨
月　衣くれさしもしこゝろ動かな　嵐蘭
日　汁月の恵は酒くらはしまする哉　松芳

月　いくすきも（荷兮が四十賀）竹馬のまたこゝにゆうかな　重五
員　やすしかりくさしはしきかな　其角

まづ荒野・除風が句は「あふのけにねまくらん此ひざの上」などの句の例を上へあげし「荒の部」にしたる例し。又続猿蓑は寄括「ねはん根しん月夜かな」これも世に例あり。これらの門中にても蕉翁のうち禁ぜられし事なれど、師の生前を犯しくかゝる句なきにあらず。見らるゝ事なり。師翁にこれを示されしかば、いまだ許されざりしとぞ。蕉翁が会とならずべし。後世の俳諧は流れを異にして、学で蕉翁の筆を失ひ、それを乗るなれど、つみあしくぬるく、ふるく流祖の教をやぶりておもしろくかへりて蕉翁と金言をとするも、されど今少し此外のん事なく一句に浮くかうらみあるなど

んは体をしく用ゆべし。蕉翁もただ深くさとしてあらくいはれ
されし。癖の事を説しられたれにくあらば、い細く明らかなし
人をばかたく蕉翁の勝をさぐりもとむべし。深く此事。
今時にくこれを命すべし。「これ何の為ぞくやものおそわるよひ夜
かくるかの一つきれ。六帖貫之といふ事かなど。け上るぞうりにくそ。そのん
蕉翁もおがみ本に下句に一夜つぶるつもうくいはるものし。これら
の上句をも岩霞句にしくす七字一をしもやいはゆる深みきといふべきの
かわりぐくとうわれしの境をぞこれにくわすべし。されにく癖の事
すまじきなし。蕉翁の禁じられりしたしたがひまうし例の正例とは
癖の事かわると云ふ所くいはず聊用をすぐあるし コハ二出セル内ニ付合
ノ句アルハ。癖ノ例ナルニヨリテナリ。
コレハ深哉ノ論ハカゝラヌヿナリ

○第二例　花の事 トモ

荒

春　橿の木の花にかまはぬ姿かな　芭蕉

日

雪をもうし人を休むる月であれ
これらのぶるく例には一をわする行が即下の句へで
くどけが、その間に「姿」「月見」といふものおそろしもや。
是よりすぐくわけ、かつ癖の事が正例なる事
をしるべし。花のうをにくそえんずつもありぬ
うるべからず。かしの木のひとり花のうえそもし落はるとも。
姿をとうくろまぐくくすそうく用ふく。世人の実
をとりてく、諧上をし、今取くかざるかしひと。
引きくむしけれども。橿の木の心情になげかんと強いる
いはれもし。此句ノ魂ハ世人ノ井ヿヲソシリ諌ラレタルナリ　又つるをうしといふ句と。
人を月をとうる事を貪也で隈なくくいしされ

されど、雲が人を悩むとあらば、晴の夜も月をこする
こゝろ情なきもしらぬやうなるに、あまり見ゆれば
とかく月をかしき方もなくて、雲の月はなるゝく少し
こゝ人の月に休むる、その雲の外の世人の情は心あるを
めでたきを詠じ、つれなきなし。されど詠じてかなしき
やさしきものと知るにはあらじ。これをもつて今より
新の説を発得あるべし　以下皆｜ヲ以テ下ノ哉ノ打合ヲシラセタリ

春　若竹のうらふみたるゝ雀かな　亀洞

同　幕きれ微雨こぼれくる蛍かな　柳雨

同　先明く岸の末ひくき霞かな　荷兮

同　山ずそのあさまき畑のくづれかな　越人

同　山畑の茶摘をかざす夕日かな　重五

同　朔日二日か柳のうぐひかな　荷兮

集　初春の事里中のなぬ日かな　昌圭

同　晝されで若菜青まぬからかな　芭蕉

春　あさがほまつれそめし嫁の男かな　同

同　傘をさとさく星こる夜かな　友泉

同　雨のゝくまで一下座入りする夜かな　雨桐

飄　芹摘しくしけく酒をまき瓢かな　且藁

荒　生鯛あがるうらの春ぶりかな　冷碩

同　よとさのく鋤車さのやすむ嫁めかな　長虹

同　おろしかく鐘しげかなる霙かな　勝吉

同　うひしさくりの實おつる祭かな　芦夕

同　浅漬の大根あらふ月夜かな　後似

同 かしましき ちかひにまさる鳥の声　露羽
同 我らしものうく たりね芒かな　素秋
同 哥がらい わくさ人のあれほととぎす　智月
同 秋の夜はやしろのうちそらのまかな　送翁　野水
同 いなづまは そりつまぐる別かな　釣雪
同 すゞしさは座敷よりする鱸かれ　昌長
同 冬がれは風のやすさもなかりけり　洞雪
同 茶の花をのぞく関はかひあれかな　杏雨
同 おし涙とつまとくさぐさいろまかな　重治
同 木葉さしあはくさびきかるかな　一髪
同 馬追より駒車門寺湖のあれ　一井
同 さらさらとかくなきずさ手にお枝かな　夜舟

同 高声は頬とあかるる雛かな　一雪
同 又起きの座網にかかるかすみかな　一井
同 おしかけ寺十日もそやき旋かな　風泉
同 花は寝くら門くれて湖の春　さ川
員 あくびしてもかたじけなしや月夜かな　野水
猿 声人はかくれてときぐれかな　尚白
同 淡柿をながめて居る十夜かな　裾道
同 又ふられてよびかへされつきのふかな　羽紅
同 鶉のこしよりちかづく霞かな　示蜂
同 椶櫚の葉の雪は得てあらしかな　呼童
同 鳴きの様のちらちらさき二月かな　尚白
同 ぎぶしくれに寝ればなき寝みつべかな　宗伏

ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆
新田に稗殻煙るしぐれかな　昌房
野馬に子共あそばす狐かな　凡兆
呼かへす鮒売見えぬあられかな　同
青亜追悼
乳のみ子に世を渡したる師走かな　尚白
あかゞりよ鶏とせりあふ夜明かな　同
鮎の子の白魚送る別かな　芭蕉
炭焼に渋柿の[illegible]かな　玄虎
茨ゆふ垣もしまらぬ暑さかな　来鵲
腰かけて中にすゞしき隣かな　洒堂
かゝる身れ柱かゝれる早苗かな　魚日
蓬の葉をちぎりよせるめ[illegible]かな　残香

積あげて暑さいやます畳かな　卓袋
夕浪の船にきこゆる雲雀かな　猿屋
さく花をむしりてしげる茗荷かな　木節
白日シヅカナリ
とらまへて麹ならざる胡椒かな　柳枝
細工にもならぬ桔梗のつぼみかな　随友
竹の子に身をかくさるゝ岸のくづれかな　可誠
いさゝ川名も川すゞしけり　里圃
あら鷹の壁に近づく夜寒かな　畦止
病僧の庭はく梅のさかりかな　曾良
猿蓑にもれたる霜の松露かな　沾圃
和川に富士の影かくす汐干かな　闌指
菜畑の中にひとりさくらかな　卓袋

同　のぼり帆の淡路はなれぬ汐干かな　去来

同　一株の牡丹さびしき小家かな　尾頭

同　菊畠奥ある霧のくもりかな　杉風

炭　秋のくれいよいよかるくなる身かな　荷兮

同　一枝をさげなる竹の若葉かな　仙花

同　抱のわくさをのこぼいれる花見かな　斜嶺

同　蘇宗祇池は蓮ある心の那　東寺

同　こねかへしてもへしくかけし柳かな　湖春

同　傘におしわけみたる柳かな　芭蕉

同　をがれの樋によりかゝる槿かな　同

同　（木曽路ニテ）山吹も巴もいづる田植かな　許六

同　川中の根木によろふすゞみかな　芭蕉

同　蕎麦の穂の家つゞむ雀かな　相実

同　梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

同　山ざくら小川飛こす女かな　普全

同　月雪をとりくらべける塚かな　探芝

同　風の音は命をからむ小鍋かな　為有

同　氣相よき青葉の麦の嵐かな　仙華

同　町中へしだれて蔭の柳かな　利牛

同　土さゝぶ蘿にからむ椿かな　孤屋

同　五人扶持とりてしだるゝ柳かな　野坡

同　はなれ月まづさそはれぬ涼かな　仙花

同　宗鑑もつゝむ椿かな　曲翠

同　青柳の泥にしだるゝ汐干かな　芭蕉

冂 障子ごし月のなびく柳かな　素龍

日 四ツ五器のそろはぬ花見ごころかな　芭蕉

日 梅がくれ節にちらつく初日かな　文考

日 とかけしも翁ににほへる菁かな　其角

日 うぐひすの声に起ゆくすゞめかな　桃隣

日 鶯にホウと息する朝日かな　嵐雪

日 鶺鴒の尾にふりかける柳かな　一風

これらのごときも同じ例にて。右の外の正例なり。みあや
まるべからず

炭 かうくしごみなく門の薺かな　怒誰

日 人声して夜半をすぐる寒さかな　野坡

冂 団る侍町のあつさかな　去凡

続 梟のかまゆむ姐の若菜かな　曲翠

かくのごとくなるも。右の例にてあれども。「ごみなく門」「夜」
はするときは「団る侍町」「侍子」など。上の句に出来て
はずされず。これらは皆ちかきあたりの詞とやかく
つゞめる例としるべし。深くさぐるべし

○まへうちあはす詞をとぢく例あり。連俳にてくはしくこれあり
一例をしるべし。其ほかよむまじき例あり。されどかくのごとき例を
しるべきやうにまをしてあやまりなきや

炭 灯とともしたれぐさびしく暮れかな　許六

読 麦藁に錦飾の店のかざりかな　許子

日 姐は人参の根あるさかな　沾圃

荒 よすがありぬぐらしく花のちかしかな　信徳

日　まづ頼む一つ秋の蚊帳のなか　宗和
続　三あかく人にしられてすゞみかな　素築
日　椎の名の五助として月見かな　如真
猿　病鴈の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉
炭　ちりくと木がらしの花見への留守居かな　丈艸
春　山寺に米つくほどの月夜かな　越人
炭　並松のかきつけし町のあつさかな　臥高
日　うの花に芦毛の馬の夜明かな　許六
猿　水底をみて来た㒵の小鴨かな　丈草
日　茶の湯とてつめたき日にも稽古かな　亀翁
続　十六夜はわづかに闇のはじめかな　芭蕉
春　雪の原蕪のまるれ落一かな　四羨

炭　箒目に霜の庭訣のさむさかな　游刀
春　腰てらす元日里の機嫌かな　舜夕
猿　なかなかに心をかしき臘月夜　其角
続　年切の花木も椎の若葉かな　千川
員　麦喰し雁と思へど別れかな　野水
瓢　木のもとに汁も膾もさくらかな　芭蕉
炭　猿月一下足ずりも[illegible]　去来
日　梅一本つれなく草のすゞきかな　露沾
春　藤の花たゞうつむいて別れかな　越人
炭　ほとゝぎす一二の橋の夜明かな　其角
猿　彼岸まへさむさも一夜二夜かな　路通
炭　枝長く[illegible]標かな　湖春

同 あすといふ日のよひのくらさかな 荊口

続 李白が宿のむかひの。弟子かな 万乎

虎 花のあくるさはよもぎの。簾かな 子珊

同 猫の子わすれ川かくれ川。胡蝶かな 其角

同 中下もそれ相應のおもてかな 素龍

同 法度場の垣より内へすみれかな 野坡

これらのいづれも、かくのごとく上五をふせたる詞あることをみるべく、簾

の外正例かくのごとくきはまるべし。かくのごとくはゞかれる例を

つゞけのがれて事なりしも、簾のかのやつしくすべし、寄

まゐらせられ、かくのごとき句あり

荒 すゞしさや床寝より飛る鱸かな 昌長

同 さびしさはうの實落る夜かな 芦文

春 やすらふや寺かくれぬ奥のくさかな 雪丸

猿 さびしさは栗の葉しづむ清水かな 柳洗

同 うぐひすや葉がくれ梅のひとつかな 杜國

これらの句につゞきて正例・変例のごとく伝へたるなれど、

皆かゝるゆゑむづかしきことをふせて、これをきはめて

一例の変例とすべし。寄せてよせぬるよしやしいそぢ此し

めでたしとおもへばかれど、俳諧は字数すくなきゆゑなれ

ば、これを詠じ、かくのごとく何となりとも、いづれも文の外の

思をつくすなりとみるべし。是れらの例をつくすべきこと

人々の心得あるべきなり

○まことの簾の外のこゝろえ有。同じくそのうへの指

事のあかするかと句も寄にたくらべ、いれかとくらべかなや。

まるをかくしゐるもまへは一例に用ゆることの例と
なの例と云例をひとつよしくつゐてある抄しとなるべし
前にくもに寓例疑例など多き事なれど、此変例疑例ヲシル　ハ例ノ多キトサキ
トニ三ノ定ムルコトナリ　云文がある抄結抄には寓隊疑例を探る
まてうりそれぞれあんしんて連俳して、このむづかしき
あらずやうに字数すくなくして天爾波ばかり自由すべし、いまで
にゆきつるべきに抛かりしとや

○集には「梅柳さぞ若衆かな女かな　芭蕉　これをいひやめづる
しる例にさぞといふ詞を用ひよくあるをさしたりとおもふこと
にて知れる句なれば、かやうの作者は字ある許謂なり等
ようなどこれをしらず、うかゝおのれが所為なるべし

○また寺まつりの例にゆきあたく「すゝしやあるべし」など

よべきこかれしかといへるなり

員　月に柄をさしたらばよき團かな　傘下

荒　あの雲はいなづまをまつたよりかな　芭蕉

これらの例はまたまた稀にいふべし、まづしんと文作を操り
なくしてもしかるなるべからず、かの正しき例にしてさかりしば
進めばよき句あれば、よき正しき例とおもひめぐらせて作
じぶんしおもひまたたしかにきこゆれば、あるべし　然例とい
すべしめ句なるべし

○また何に何をつかふ例あるべしとて

猿　水無月も鼻つきあはす数寄屋かな　凡兆

炭　鬼の子に居縁をゆるしひいなかな　如竹

日　このはさへ接待もなしさかな　不鶴

荒　おぼへ刀もさし二毎みじかし哉　胤躋

日　うしろもふみちる林の馬かな　胡及

日　あけぼのも月うる何のひとらか　湍水

日　いざよひもまださらしなの郡かな　芭蕉

日　一本の茄子もあまるすゞみかな　杏雨

日　よし野山もたゞ大雪の中でかな　野水

続　さらさらげ小豆も市の師走かな　正秀

日　大名の閨にも寝る夜寒かな　許六

荒　あらしもさむし息つぐ小春かな　野水

かやうの句ども、たゞしくもすぐれたれど、詠の例し何かの字あるは、大いにあぐれば上を動かすの字かはる。きる毛家のかはらねば、詠のもとはあれど、これらくるに上の

廓のかゞ、名のか、又男例のかわかざれば、上字毛家のそれある

かやうの句言と味ふべし。計例何も何かのよく別例かる

をなすべし。何も何かの所も例手にいかにも例かる連

寺俳諧まで、いかにかりなぐ上に出やる廓のかは上と

旅のそれ、おもあへるも、花の卯もしあり。「廓　あやめさえぬ家に

するに、花の「日　女郎花うちぬくもゆるかに　日名「おもかるか

くれなゐかゝるは。日　かくのごとく、はかなかり。これもとぞ詠のもと

なり。必ずまいかはあるやらくみるべし

荒　角落てやすくも見ゆる小鹿かな　蕉笠

猿　すゞしさや野山に満る念仏かな　吉来
善光寺開帳

けるども、所も例かりかくのごとく、初まりを寺会するに、

よくよくみがくく初にかし、相敵するもの、ことさくの理とあて

むすれどもけしあんかまして、程ものくまる氣理氣かげよつ
よくあん諸まとしく程をますしきくべけてずめの句の皇
て、小廉の角落るが出んらしく見ゆるよこかさハ不自由
まあるべしとぞやんかる異、かげよつまくらそやくやしく花り
秘くるなり

○まくやは一字ぶと称するあり、我門ニテハ 等にくて、（弥カト云）
をめくハ上よりもの字をとけくあり、上ノ何モ何弥ハ御ニ同ジ もの字あるき
て、疑のかな多しされども、もの字あるは、裁のかなもの字なき
は疑のかなりとやすまず、もの字なかうてもけ例の外
なむ事なり、「あらすくはまだきも月のかくれて」の 伊物 これらの
字なきの字ある例也、されども又けもの字も詠のまゝあるなれども
かのうく疑となかるべきなりとぞ

荒　草まくら犬もしぐるか夜の声　芭蕉

この句もいくへど、此「も」何の例ともさだめがたけれども思ふに
は、これも秋「疑のかな」のやうなりといはんか、これ
て続後拾遺集に 冬隆 「秋ぞかはらぬゆくとしのつらさも」
ゆくくくよみたれども、作者の心も「疑のかな」なるべしと、六文御
続みよくくし論ずなり。但しもそは付句のて、毛家の例なり。付句のて詠の心にくさが多り
今は此疑の句、このみや殊さら同じの論なるべし

猿　鳥どもも寝入て居るか余吾の海　路通

日　鶏もばらばら時か水鶏なく　去来

続　やまぶきも巴も出るひなかな　洒堂

これらの句、ゐへの疑問の句と同じく、詠のかなとくは
疑のかなるべし。すべて発句を試みるに、詠嘆は一向なるの

例みえず。いづれも「哉のや。これらあるは字ものゑ。俗にては
一字あまれるといひて詞につかふにいでず。さて哉のやかる
ごとき俳諧にこの例のかぎりなかるべし

荒　あらしとも山吹ちるか滝の音　芭蕉

冬　すてられて寝る夜のはなれしも　羽笠

これらの句も。しかいへども。この「哉のかれとも切べき句にして。
されど翁芭蕉翁羽笠らが正風の俳諧にてもすこしありける。
かつて詠歌にはなくてきゆゑなるかの上手にても。
詠歌にまかくあるをことわりなるのを知るべし

も

これも詠の中にこれも其意なりてけれく別の例なり。さて
あげることなりてるがごとく。其ほか字よりて其の事ぞのこよろしき翁の

んとおかるほとく。なお前におりくたがふの。いかにも下。秋下の毛家の宗
下をさこそよいうそく言ふべし。むしく。なほかれぬ筋をものそくの
なをの筋にかなひよせさやんとするもし。その本その筋のつれぬ本。雅恩
の詞とのかはるく。其にくそ。終に「ことすみしも「子身としも
ルよおもし。発句にくしこそあるし。そのお「ぞも「そも「今しも「つもなど
をよみりけにたるくも此例なるもあり。古今集などにも。たとへば
目にも多くある。がよりてこれを歌と定り詞なるべし。むしろ所あり
をことをかり

炭　ころくしくも冬るかいこり　嵐雪

と又綴句をば句意句も「隣のつ節と嫁とよびよするか野坂とは
句なり。この節句のもの嫁の姉にいくそうて証更にありく。隣家の人節と
まびに物をきすんでみくそのいそのちるを扱ひのあまり何がな隣の様

娌をとらんとて、門の雷かどのかいてある常ゞとてよしぬはかなもおのづく
ほむるは、姑の内よりのぞく、あしてらしやとらつるんほく隣るから、
されば汁もち、その嫁とにくしとも又ねくしともいはず、その飾よおのひらや
さやむかゝるよ。てうくしきるをかく、引しといふものく

集　あらくと日もつもしかなくし秋の風　芭蕉

冬　笠めぐく与河よしゆく小時雨　野水

猿　まさも大事の鮒をとり出す　去来

○疑膺

【か】瓦うらいえ、かしやしの字川なり。来るを後世に、汁やなりの言
引をとらずしく、今にみすゝみがりてつりてゝまでしくかのほそ、時的
に、ワが父師結耕こゝの言おくしくと人おれたりかれをみるぐく
べし。今その要をとりて、かへあるくてみるんと、やしおもひするんて、古今
集に。在五中将斎宮ニ忍ビテアヒ奉ラレシ後朝ノ哥ニ「君やこし我や行けんおもほえず
夢かうつゝかねてかさめてかといふ。哥上るゝかやなり下句を諸かし、これ上の
句意に男がまふりしも、我かゆかざりしといふも、ひとへにおもひげなる
ほくやとおもへし、下の句意にて切あまりてせまるまでもせまいつもりよ
夢みるまに桐たれることかるをともはるみぬ、あくしぬきとあて、我
うつしあくさめてこしぬてみるんと、されば上をワがみひはじめしれぬ
を見れ下てその実をとらばの知んとするんあるし。この事は、父師結耕よ。

かゝる間のんかなり。やすき所をよむとしといへり。よくあぢはひてしるべし

荒　奥山をおしわけ出る岩の角　端水

猿　かしこき人の小袖（千早ガウセヌリシ付）ぬく今や土用干　芭蕉

この二句端水が句を岩のかどのつゐるとみて、奥山の人をかしこきぬ人をとつけしとあるまじなれど、家につかふる人を織てあてみるべし。これつかてあるは眼おほくそのへしなるのさしれながめはかりといつて、次の産翁のるて、賢木の人の衣服を、虫よけするわざとて土用干するのなるまた人の衣服をするく在着ていしめるのさうかられぬる人のやえも、かゝみとるべき小袖のかりわざ、いつてくもおこなふごとくの土用干もやすしん。あてもののろうやとらひけられるんで、これを奉らかさねつのかたより見てれねあらはやといへり。その差別あるを句で味ふべし

猿　外迄も白ぶしらか馬乃沓　許六

同　鳥どもゝ寐入て居るか余吾の海　路通

同　麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉

冬　ひとりきて出替の留守ゝ内侍ども　杜国

同　あつしくも碑ゝしきへの骨か何　同

同　寄子あひく人をチンバか　野水

同　捨られてくねるか鴛のはなれ鳥　羽笠

夏　ねざめしかくり文字のゆがむ戸　傘下

同　太鼓うち陸子のいだき行　同

猿　僧やゝさむく寺にかへるか　凡兆

同　雲の峯今のは比叡に似たるかな　之道

続　麻時か文こゝむ月の初まくら　其角

続　[illegible]卯月陣屋とこゝ似たるものか　乙州

続 山吹もちるか祭の鮒なます　洒堂

集 花の雲鐘は上野か浅草か　芭蕉

炭 かへるさや家並清く　去来

続 火の消て胞よりつゝ夜の声　正秀

日 首の座はいなづまのする其時か（竜口寺ニテ）　木節

葉 ほろほろと山吹ちるか滝の音　芭蕉

日 寺か杏もとりよあらずにし背　文鱗

日 去人の手わけられ鶯の声　宗因

日 草まくら犬もしぐるかよるの声　芭蕉

日 こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

日 鉢焼を寒風ははや沈かう　野水

続 狼をおそりうらんけさら様しき　杜國

日 髪剃をみのまる雲の比良のはけ　陽和

続 永引の雲の晴か合歓の花　千那

これらのごとく。かはすべて捕へてある物あるがしらずがちにうたがはんと
するなり。やもさるとて推しやるなど也。格下のやの条にはなちやくみる
べし。（但コレラノ内。「髪剃は「すそわく「偽てもむく「蘇叶ふは「山吹もナドノ句ハ哉ノカノ心ニナシテモカナヘリ。カヽルコハ辞ニモアルし）
○又かの下に。らん。けんなどもあはする例あり。「花ちるらん
「川かりんなどのさぐりし。これまたひとつの例にて。即けりと同じ
なども。「ほろほろと山吹ちるかといへるも。「山吹かちるらんといふべきを。かく
いへるなり。「狼をおそりうらんと見えたるは。「狼をそら恐ろしうらんと云ん
かるべし。かくのごとく。らん。けん。かやの詞にあちあふする。そのかくれ
たるがのかはや。ちらにおもはせんとする時の用にて。かとさらずがなくてよ
たがへるなし。されど俳諧の例の字をすくなくぞ取ては。らん。けん。なんど

おくべき所も、これをかぎる例のあまり、これを中のうらとす　但器
スルト略セヌト二例ナリ。脚結抄ヲ見ヨ

猿　ものゝふのこれの初衆の中や霧り　曾良
日　いりまじりやまつずれくなしくる　千那
句　ゆくんなの走りけぬきせこの梢　丈草
集　さむれんのこも花くいまする花の末　芭蕉
続　いづくへか落る世法の蝶哉　里圃
貝　なれ来しかまりあかくいうちけり　嵐蘭
猿　天井しもめり川うるづくら　去来
荒　ゆ至てうどの大名か一ト　さかりかな　牽下

これらのごとく例よく多る詞をよくみるべし
○又ゑだかしらかへのかわるあるなれよくみるべし

○又号けくて、らんかなるかしらかなしくも他の天爾波を
継ぐ例かて、俳諧ではその変化さくなし

猿　内裏の頭かよぶ音をそれ　乙州
炭　名月や富士見ゆるかと駿河町　東花
日　盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡
貝　柳ちるかと例の蓮池　野水
荒　一夜とも山吹のぞくゆふぐれ　濯雪
日　つきぬるかと咲のめぐみるさします　舟泉
続　名月の花かとみえて綿畠　芭蕉

これらのかしらなるこれ　カト見テ　カトキヽテ　カトシテ　カト思フテ　カトイフテ
月の花かとみえてといふ類も、やがてみえてとあるが略なり。との字
かは下見下聞下為下思下云の口伝、のへてあるなり。従との條下にあり

おもひあるべし

○又このかはり字にて　けりとへ　けり　けりや　などは何れもひらきて
ことはりなれど　かな　かも　かなを例かきものが有は略す　されども俳諧は
すまじき也　天仁波のつよきを所作抄をよくひらくつかふべし　かな
まかも　かな　などいづれもつかつて甚だしき詞なるは　いかくつかふまじ
ざりけんこれらは俗語あしく事もあらず　次がなかるべし　されど俗にても斧
深く古今集深く一筋の魂のあり　ちからとまつて大なる損得ある
べからず　これが中に　かなといふ例にて　かなのつよく　かの一字にしくかな
のこころとなるあり　その例で一句こゝに

猿

手壁の一年もなしに年のくれ　去来

これは薄きものとして　一重の帷子何ほどの事かと　いふ心とかなり
まじりしもの　これ即かなの例なれば　すべくもの　又理を我を求むべし

まとひ出て　ひとつへのぬしく味するものなれども　かなの本意にやすし
とらへ詞する名なを同じ　但や　トかトノ別ハアルコトナリ　かやといふ例を

猿

一里はみな花守の子孫かや　芭蕉

廿句ノ詞書云　いがの国花垣の庄は、そのかみ奈良の八重桜の料につけられけると言伝へはんべれば　トアリ

これをかくやといへるは　あやしき天仁波なり　されども書きかよはして
いんとしやへのまちへ　定めて本意をおもひぬる　なにくかやといふて
もかもある詞に　廿句も詞書のごとく　八重桜の料につけられたるを
傳ありけるに　その子孫かくありけるも　明かなる中にも　さるべきこと
とよろりや　ちりしずやとさそれるにも　何やとちりそれするや

拾

六玉川高野のおくを流れるや　去来

これもまたこの例にあるべし

や

上よりいひくだしていふにてもすまれぬことばをひとついれたし。上のかの条にいひかけていふべし。やといふ字は上の詠のやのあそびし句じもといふひとつやは切字にかゝるなれども、そのつゞきて上下の味をひにくく詠を起していひかける事し

炭　こがくれて茶摘もきくや時鳥　芭蕉

この句意は茶摘は三月の節なりけれども、それより後まで上品の茶をつむにくいはすでに茶の若葉を摘むなれば、そのつむ人あるべし。なけてつむなるや茶の若葉も大かたつみ果たるに、つむ下品の茶なし。そのつむ人さへ茶の木かげにかくれて、その人みえねども、ほとゝぎすの声は聞くらんといふ心なり。木がくれてといふ所にやといふ字の出る所なり。此句を誰もしらねど、此のやをふくみある人は意をきかされがたく、たゞ一人きく。茶摘でさへ聞きしといふことを、羽のつけ所のごとくなるべし

続　はるの雨さゝや土筆の長短　閑指

日　うちはらひ若くさも馴ぬかれぬかへ　杉風

荒　すごすごとつむやつまずや土筆　其角

日　埋火もきゆやなみだの烹る音　芭蕉

続　手ゆるみは冬もしるや酒ぞ有　氷鷗

員　すゞしさや妹とむしろにくるゝ川の鴨　野水

冬　初花の世とや嫁のいかめしく　杜国

猿　山はしら海をみよしや月のかげ　智月

日　ぞやがて桑のかなぐりかれとや秋の風　路通

これらはいづれも上のやの字の例なれども、此例は詞よりつゞけて下へかけたる句なり。上のやは下へかゝりてたがへつゞくべし。此のくだりかゝるやといへるなり。これを俳諧にてかなふやといふ

のうちにして此五例をよく〳〵詮ずべし詮ずる時ハあやまちなかるべし

たぐひなるは

荒　蓑虫のなりかゝみるや帰り花　　[illegible]

此句ナドハなりかゝみるトイフベキヲ〳〵トイヘリ〳〵ヌ例ナリ。モシやトイハデ叶ハヌ〳〵ナラバなりかゝみるなんナドイフ詞ノ下ニハやハいフベシ。スベテ〳〵カハヌ例ナリ。カハツカフナリタトヘバなりかゝみるトツカフナリ。コレラハ弁ヨミモ早ニヘヌ人多シ

炭　うしろ向く鶴の栖や冬の華　　[illegible]

コレハかトイフベキヲやニアヤニシレルナリ

員　[illegible]しや千鳥月　　荷兮

猿　春雨のあがるや軒になく雀　　羽紅

春　柳よりなほ[illegible]鞠かゝりや　　[illegible]

続　[illegible]のがあげしや土[illegible]　　圃仙

荒　うぐひすまかなじ[illegible]やお盆　　[illegible]

コレライヅレモかトイヒテ叶フベキ句ドモナリ快カラヌ事ハ脚結掛ニイヘルウケザマヲ見テ會得スベキナリ

○中のやといふ例あり。これに二例あり。下のうち合を思ひ[illegible]思ひぬるとの上の中のにいふ同じやのたぐひあり。詞あるを一例とす。そふるらん。又何かぞの詞のうちあるなり

春　[illegible]や[illegible]のつよ[illegible]　　荷兮

猿　子やまうんあまりや雀の宮あがり　　杉風

焼飲辞ヨソウクリテ

員　子がやなりんその子の母も数のくり　　嵐蘭

安国論寺ニテ

荒　うまきのかゞやまてそれらん　　越人

集　こ川[illegible]菜のそゝやまうん[illegible]やせん　　芭蕉

続　かくてや此山の秋をなまれんとおつまく　　今千代

員　孤つきしや人のゝ[illegible]しらん　　越人

荒　初雪やむしのあれまからん　同
同　きらちるの喉南やかんするの身　嵐蘭
同　りんや塔にもちるらん月の鐘　胡及
同　小柑子栗やひろまん枕の間　舟泉
同　桐の葉やひろうらん秋の風　冬解
同　とぶてやいれらん枝むすぶ雲　冬文
春　江鮭ありやなしらん富士の湖　芭蕉
拾　寒の内やいづれの草に入らん　羽紅
これや世の中のやの所き例ならぬ文思ひやる例ならく
黄　さまざまに隠れぬものや寄るの稲　芭蕉
同　さびしくもなく浮世の蝶　挑　同
続　若月にも藤の寿や田のくろ　同

集　梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉
同　象潟の雨や西施が合歓の花　同
続　山吹も散るや雲の桂　露沾
同　よもすがら傘かる宿や一町　闌水
同　ふかれ木の根やあらはるる花の風　如雪
猿　桶の輪やぬれて鳴やむきりぎりす　昌房
同　大峯やよしのの奥の花の果　曾良
同　一筆これや鳥羽田のおしまる　之道
同　風流のはじめや奥の田植歌　芭蕉
同　すみれ草 芭蕉庵ノフルキヲ訪 小鴨あるかと訪やこれ　曲翠
勲　店ゆくうらや白子若菜売　芭蕉
貝　月の行くやあすの井の果　冬文

春 山は花。かきねかきねの酒ばやし　亀洞

炭 麦跡の田植や遅き螢時。　許六

日 この葉まつらけてや罌粟むくろ。　其角

猿 水無月のふくや桔梗や。水仙花　不玉

日 ならんで小神をいまや土用干。　芭蕉

日 今やきりきりの刀さし出す。　荷兮

荒 月やまさ耳や出でる年の暮　西武

続 鳴瀧の花や我も雨にしづ(?)　如雪

日 門みりや帰りし帰去の洗髪　里東

荒 おもはずや追儺のあげし鬼の面　荷兮

続 八専の雨やあれまる菊の露　沾圃

荒 妻なくて女房ながや暮れ女郎花　荷兮

猿 ころりと竹田のさしやゆく時雨。　乙州

日 浮ぬれん手洗が中うつる。犬のさぞ　野水

荒 冬ながらこそや去年の年の海。　長虹

続 庭の木のよしや引込ぐ乾(?)けり　李東

荒 あけぼのくまのそば乾や胴がくるる。　野水

猿 この蔓や西瓜上戸の花の種。　沾圃

実方中将ノ塚ヲ尋テ

笠島やいづこ五月のぬかりみち　芭蕉

此句ナドイト正シキツカヒ方ナリ。コレヲ以テモ上ニイヘル蓑虫の如くつくろひやトイフ句ノ誤ナルヲ思フベシ

続 一田づつゆきかへりする燕の声。　沙枝

集 水鶏なくと人のいへばや佐屋泊り。　芭蕉

伏や　この伏やといふは行くべきやの一例かはり。行くなり「なれや」「なりや」

「それや「ぬす人やかくしもしし。俳諧にて出すに「それやのこなゆきけしく「それぞやといふ例がらぐ多かる詞なれど。チヤニヨツテ何とかといふんとし。みなに和合の詞と異なるを。チヤニラといふ心にてなるゆへ。たゞ用ひ侍りし。伊勢物語に「秋の日に。まだきてさりておかれや霜ゆる雪やらぬをまさしんされちらすひたる例なり。古今集に「夏ぞらにておれ物や实がしまにわかとあるは和合をとあらずる例なり。されしはなんやべし

春

一夜こす宿に馬こふ寺かなや　野水

前句「都に廿日はやや秋の影　羽笠　都ヨリ廿日ハヤク夷ヲツカフハ馬カフホドノ寺ナレバニヤトノ心ニテツケタルナリ。後句ハ「ひさし魂まつるひさしぎの月　旦藁　コレナリ二月ニ魂祭ルトイフ事。即それやノ詞ヲウケタルナリ

夏

酔ざめのあれのこしき此なれや　傘下

前句「雨へまいりて行ける犬　傘下　犬ノ雨ヘハイリテ行吠ルハ。酔ザメノ水ノ飲タキ此ノ顔ノアヤシゲナレバニヤトノ心ニテツケタルナリ。後句「ふじ若ずゆる雨の降出し　越人　コレハ雨ノ降出ノシヅカナルニテ。それやノ詞ヲウケタルナリ

猿

ひだりのふく小田に土持つ此なれや　珍碩

前句「かさあらしきまその暖ろ　乙州　コレハ旅人ノ立出ル笠ノアタラシキガミユルハ。小田ニ土モツ此ナレバニヤトノ心ヽ　後句「古きいてつくくぐきわるかり　素男　コレハ祝フテ下サレタルハ。田ニ土持ツヲイハフ心ニテカトノ心ニテウケタルヽ

同集序

此道のはなめく、おこなふべき時なるにや　其角

コレハコノ集ノ出来タルハ。コノ道ノ面目ヲホドコスベキ時運ノイタリタレバニヤトノコヽロナリ

続

弓固しる此なれや　ちぢぞろ乃　文浪

コレハ藤様ノサキツルハ弓固トル此ナレバニヤト云心ナリ

この例やに四例あり。其一に「疑ふ例やといふ。即此上にあぐる例これし。其二に「こつす例やとえこれをかなしんやそとふ云んし。けらふそ。やそのやとはやかり。第四「かなし例やとえは此時を。かりやともむにくやを詠のやかなり。其四「疑ひく例やとえは此時を疑ひそへのまつんそかなり也。此四例つてならずくいづれにも上下の事がしくるく。田例しまこそなり

集　まゐれや名もなき山のあさ霞　芭蕉

同　こ布のあまや隠家の垣の菊　同

この二句とも。よるの用例のやうにて詠むる体やの例なり

【やも】これは深川のしかるにて味せずして。独り人の心に決定を表

せんとする詞也。上のかなの示す所すかく。「ゝ」「や」とは同じ調ながらも。

その語意。かなはソウデハナイと決まるし。やもはソウデハアルベイと語意

するや。これ自他とやとかの語例にくかくいかるもし。七部のうち

に例みあたれど。上ついかずして其川の子におもむきてあるなれ

ど古例なしとくつゝすりぬともあらず。俳諧そこの心を人世なるをを

陥句にはその魂とたすくべし

炭　かしく筆のひろひ出にありしあさらずとよ　芭蕉

【やそ】これもやも類にて。されど流れありて。それくいふなんにてただ

やとういふべきと。今てもそのうちの筋をおもひはかりて

わしいそつるや。これを俳諧にしてみるもこころより奇なる

ぞよ。一條院御宇の時より候ひてよあ御縁し

○願属

世ニハ願ト誂トヲ混ジテ。願トノミイヘド。願ハ我ヨリ子ガフナリ。誂ハ人ニアツラフルナリ。凶父ハジメテコレヲワカテリ

ぞや

これらは。俗に「カウシタイ「アヽシタイ とおもふ「行タイ「聞タイ「見タイ などいふタイにあたる句なり。古今集に「めぐくさむ「これやふかなぞふぞ ききあるはおもひかけりて手を武蔵やぞやとらふて。こゝろさしてぞいふ也。其内やうき かなしびてんや。或はゆらぎやとらふて。ゆらぎいふにあはれふかきなどふ へるものとなるべし。論は。一見せんぞやと様にかゝらうてすらし古今集に さぐりたるまゝ今集に詠時に此詞のましし。ぞやをもとさるゝを かんげみの出す事ものいまだなしぬ。中に此し時とおいねがふんといふ かくものゝぎ所あるとぞきざし

炭　芭蕉葉をちらうぞや伊勢の三川役　芭蕉

芭蕉葉は柱くゝあて。伊勢がり来る袖をぬらすのがるゝにつけて。伊勢の御師をたのみて。いかにもわかれんとの心あり。即ちたのみとぞ 心なり。此句など。凡例に論ずるごとく。俳諧の魂といふものあらず あらはにいはずおもしろきいひかけ句なり。芭蕉翁の句なれども。宗匠 伊勢なる人をたのみて。芭蕉をのべたる句也。俳諧を主とし。誹諧の本とすべし たゞこれらただ芭蕉の句としてのせて。芭蕉翁の情をさぐるべきひ がくし。奇なるもたゞこの誹の言葉あらずして。言霊のあはれなれば そのまゝあげらし給ふこと。扇にまねびて今ほれをみるべし。今あらんには さるべし

荒　荷兮が宿にふしぬる夜。茎鉢出してくく。詣つけゝるかりしけいさかれど
土器の手際みせばや菊の花　其角

日　山畑りその杉ぞかしげや葉引　杉芳
翁行脚ノ古キ衾ヲアタヘラル

猿　ぞ出しく初霜見せばや紙衾　竹戸

侻　滑らかにもしとろやぶや花のまろ　野童

炭　さしぶりけくさびや五月の風のさき　洒堂

曰　さ川の影ワが菓子もつまみけりや　利牛

集　ま葉のしく沙月の雲めぐるなりや　芭蕉

右いづれも何ニタラバイカニ何ナランとの心をわすれずひとつや。「ぞや那こつそ。ゑに縁属にはいる詞の也や。これも何ニタラバイカニ何ナランとみな用いられしくものもさまざまくおもしろく流ゆるし

集　年の市線香かひに出ばやな　芭蕉

荒　落葉のく皆をつりともよにも　越人

手にも「線香やな「こやとやなかなどなきし

もがな　もがなも　もがなとも　手にも待ちてそあるか。らもがな　ずもがな

ほしが抑それが文もがなや　もがなもやなどてよわかり。ぶれも例えおくくし俳諧にはつりのべし。凡もがなと云詞をさして酒の飲ならずとくし付ならば。水なかりしとさそひ時に「あらまほしきとさんとさわぎ。本意の事にそれ付なし或くしこの事をねがふ詞なれば。いのくの事をねがふ詞也。かく例をねがつかなるく。もの字あるがあし。くくしくちをもひつくかし。後世セメテといふ詞。上古にかなふ詞なるがそのかのし。もの字をうひ。セメテのいとしも新古の家集などにもやし。　天智帝の大御歌に「いもが家もつぎてみましを大和なる。御笠の大島の姉にありみさくみぞすく。これらの事もの字のいはさるべし。がなを手にも待とらべし。ずがく濁音に。字川の読とひとつにあてかならずで山さくらとひつで山と機しこれをさの字を濁わず。

山のさくらこそちりかたになるがさびしされどかくらむはるのなかのねがふ
しきなるはいかばかりかなしからむとかくみゆるは詞のいりくちなめりなどの
んあはれなるのみてねがふといふ心みゆるなりとしるべし

集　まりしは都へゆかんなきがな　芭蕉

【てしがな】てしがなは。つかふ事あり。又何てしか何てしがなとも
いふ。もの字あることなきがごとく。上のしがなといふにひとしく。本儀の事
あるは。うちに何をかたりたしとすることをねがふなり。又
がなてよりてかなてなどてなどの字ある天爾波てにといふ字
の下に。別に詞あるべきをさしおきて。でといふ テオイ
夕といへるもてんを テユカウ といへり。てノ下ノ詞ハコレニカギルニハアラズ かゆへに詞
をつねにまねくとかくべし。されど古今集の「耳なしの山のくちなし

えてしがなといふ事を。耳梨山の山梔子をえてし、染めまほしくおもふとぞ
このあさりしといへり。同集「梓弓ひくあま山でいつとなしわくるよ
ともいふあらびね。てしがなといふ事を。心のおもへる本でつまびらかに
川らきとふるまし。されば山まで。いくさおなるたのしくとを
しるしとのんなり

【も何しか】これもての字なき所に。わが心の事をのべて。ことのと
なきあはれくかして。成就のしがたき事をうつす。「ひかりと
にてもしがなあり。甲斐の山をさかりなく見てしかもとのかな
るべしなるなり

【ね】これも願のね。ことなく。事まで「かくもがなね「ひさしをね

などもあり。これはもと去倫のあひ（廿五年のあひ とふこれも）のかなしひするにく、頼とは
られても、紛事のおほやけくかなりさそふこにへはねがはれなり。てにをはが
かゞもさらん参りし。とめしくそのんやさる詞なれど、ねがはしきお
あさりしくかゝるも。志とぬとの天下をまてんやべし。かの家のしまよふえるは
うえるもいふ事も。命のふえんとあるしぞ。あるかのよりは、なくおくかず
絶えて、きるへてねがはん。されど、テニヲハ上の俗語より、よくある天尓波也
以上みな昔今の例なれど。等の例ともあくことのまた
とひ例をまもつけて句意をとらするべきなし

〇 誂属

上ニイヘル如ク、コレハ人ニモ物ニモ向ヒテ、トセヨカクセヨトアツラフル心ニテ、願トハ筋コトナリト知ベシ

［よ］これを俗語にてはヨヨといふ。されどもすこしのあれくつのあざるの
あり。むかしのまへんとかずもてるざるまへにいやくたるまんと。コレ五十音ニヨレル義也
俗語とかつまいつわり。おほけなくかは音なきえたかふけのあれども。今さおく
ヨとくしつゝされど、かくあらし此義を立てずしてあはれぬべきなるのなかる。
かく事まあるかくかつのんあるる時、いかなる天尓波をうけるにしも又
つゞるをひらる時、又そ人の事かへ世をともとしまゐりしれどもする時なども。
かなゝ義をあくえしくまへかさしねぞ。たかのよこれは字をしるものあまくさる
そのし、けあるわが家学、五十音の第よりしくくその第なくいふ
さるやも後世の人のなにとて、迂遠かるこなはがふく方あいひさます
られど、此ひとつまゑのがしめ事かくし。ちかくまされをと弁じおくし

荒 うぐひすにもあがりくることに神の梅　菅廟奉納　亀洞

これも菅の水に浮ずし神の梅にあらくあそべどつきぬなまずをもて沫浮く膚見ゆるは雪のなかの物かあまりこそあはれなれ

猿 かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　芭蕉

荒 麦の雨すゞしくおく呼ぐこよ　嵐弾

日 若水やちらけくみよ雪の梅　亀洞

猿 たび人のこゝろにも似よ椎の花　許六ヲ木曽ヘ別ル　芭蕉

荒 里帰の闇をみよとやおく千鳥　日

日 するがしに富士あふぐらの月をみよ　狩野桶トイフ物ヲ其角ノ餞ニオクルトテ　素堂

日 狩野桶に鹿をなかせて秋の山　荷兮

日 それなしに園の花にも鮑どり　日

日 春をまだすゞしさをわかれみえぬかな　嵐弾

日 水あびよ蘆の葉分の上をふくかぜ　釣雪

続 桃売も出よ野の初しぐれ　空牙

荒 砧うちて我にきかせよ坊が妻　吉野ニテ　芭蕉

日 きゝとして霞みもよそにかすみけり　冬松

日 一しほの衣さへよしかへつむ　十月更衣　荷兮

続 顔に似ぬ発句も出よ初ざくら　芭蕉

日 酒部屋に琴の音せよ宿の花　惟然

炭 ありつきの月をとりさや葦の花　乙州

猿 うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

日 ぬれしろの露まろまつに露月夜　翁ヲ茅舎ニヤドシテ　土芳

春 風のかたち秋の日あみに網かれよ　荷兮

前句一碁打を送るまはりの月　野水　コレハ碁ノ二ノミアル心ヲオドロカシテ、よトイヘルモノナリ

繞　盥桶のなかにみな包尾の鯛のあり　耕雪

冬　うぐひすは起よ紙衾しかして　芭蕉

前句「梅が香に餅すゆるやかのうから　荷兮　コレハ鶯ノ元旦トモシラズアル心ヲ、オドロカシタル心ナリ

員　かげろふりけよ看經の中　野水

前句「天仙蓼に冷食あさしるの露　荷兮　コレハ人ヲ憚ル心モナキヲ、オドロカセルナリ

同　うらむれくうらみの鳥毛の瀬手みよ　越人

前句「若の朝の潮のこゑはきえ風　同人　コレハ反ヲ[illegible]二一途ナルモノハ心ヲ、オドロカシタルナリ

猿　野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

同　きれ出ようしやがて下の蜂の巣　同
翁ヲ茅屋ニ一子キテ

炭　ゆふがほのつき時雨に萩の花　斜嶺

冬　我月いでよ雨を祈かる　杜國

前句「月を追て猾楽藤と世を拾て　重五　コレハワガ身ノナリ出ル道後タルニナシ置テ、ヨトハイヘル心ナリ

【や】この例は、哥に「あけや驚「こやとも人をかたどあるなり。されども、やは五十音の阿行にありて、於行にかよふことなり。されば、むかしの人をつくるやうに心得べし。やは、むかしの物のありがたきことをも、すかすることもあるべし　コレニテ、係疑ナドハ、やニ、ソノ義一致ナルコトヲオモフベシ

これらの例、上の例のようにみぶりにすべし

荒　のこる花のこし泥ちれや杉かげ　加生

これのこる花ののこるとはむつかしけれど、いかにもよくありがたきやうに、よそのかたくやうくるあしがゆるよくとすべし

荒　望　ほる人のおもふやうみよやとく藤架と一夜おくる
まくへく
コレハ見ルホドノ物ニテモナキヲ、レヒニノヤトハアツラヘタルコ、ロナリ

繞　青柳のそぶれくるかや馬の曲　九節

集

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし　芭蕉

ね　これを謡のねといふ。上の類属に出せるねとおなじ詞にして。訓しかるも同じかなれど。又これもその余とするなり

なん　これを世に謡のかんといふて。訓とするもあまたあり。ワが家にくえ是を謡のかんといふて。かんとのみいへばあやまりなるゆへ。ゆへをいはゞまぎれなく。テクレイといふ俗語にあるを。かく「なん「えん「えん「なくとんの字をはぶきて。たゞ「な「け「らと一字なるを。んをそへたるゆへにかくの如く「んといふ音にあやまり文字なし。文字なきゆへ。むかしはみなかなとありてかくし。難波(ナニハ)丹波(タニハ)銭(セニ)蘭(ラニ)などゝ。にとかきたり。「なん「たん「せん「らん等のむとかきたり。蝉(セミ)などゝ。みとかきたりなどゝ文字なきゆへにこゝろなかれ。

五十音の外なればなり。これ五十音と経緯無くしてくるしいつゞけて。「ん」を五十音の余として。口を閉ながらある音とし。すべての音。口をひらきずしてあるなかれ。「ん」のとぞひゝかくのごとし。「ん」といふ書その口は閉ても「うといふ也　五十音の数に「うかりての余に「んかり。故にこれを和音のうしろの左につけあり。これ成えがたきものなれば。ちんとぞいふまで地事なれども今このなんをよく国にこれをものなり。されども「んの本うつしく物をとふ別するしかるに音なり。俗にも。ひどずして今迄ゆゑある事ある時。「いといふてもよかるべし。かの字の類に。謡の属にかの字にりがたく。ゆへにまかすがるの地の外とひとつ挙るまでなれば。我らはとも説くを事かき間ひく一枚ののごとく見すべてといふもよやがとさうまんして。「んの字をくゝ行くすべてんの形によく。

にける詞なりとしるべし。餘の句は。ワが心の流にはとかく抑がたき也と
あやしんあらばほく。彼是をあらはしこれを上の詞下の詞のさだまり
て。属する事なり
○近昔より。あれ何といふ詞出来たり。此句は即このかんじ。発句の上
にて句とぞのにもつかふなるのなり

拾　瓜はくる男があれ何と　ゆふすゞみ　芭蕉

○誹諧に「ゆけ」「のあれ」「とへ」「つくやなど」いふ。いづれも紫の詞の
下の衣縫(エヌキ)となりたるほく。衣縫の詞を誹諧する人にとかるし。天尓波
にあらず

続　刈合て見るくこれ気づまり　沾圃
同　山人のひるねおこされ暮るゝ　桃妖
同　魚あつる　幸もあまり　淡うちて　馬莧

猿　一月は我に米かせ鉢たゝき　丈草
同　のしゆくてかぶり川のぐぜつくる精治　配力
同　弱法師ワが門ゆるさぬ餅の札　其角
これらのたぐひ。天尓波とはいはざるべし

○禁膺

イサムトハ。カウハスルナ。ソウハスルナト。制止スル心ナリ。スベテ訓モ禁モ今ノ俗言ヨリミレバ押柄ナルヤウナリ。サレドソレハ今ノ耳ニテキクガ故ナリ。古ハサルヿナク。上下ニカヽハラズイヒシナリ

【か】上の詞のかなのかよひつゞきし。これ又さしてむつかしきやうなれども
かの人を彼に貪ることなからしめ。ひとへにせんをせんとするなり。
ふるきものゝごとく。かく制止するにかゝるも。上下の差別なくいひし也。
かの字の義をかへすがへす。ひとり用ひて。はなはだしく変化することなり。さるは木偶(ニンギヤウ)の
所作のごとし。客女の所作をするにも。客女にかはり娼妓の心をおもひて
つくれど娼妓とかゝるなり。娼妓の心を。裸(ハダカ)木偶のごとしと知るべし

猿　まつらせむとこのすれ雛のかたみ絵の衣　荷兮

雛のかたまゝ。衣裳をきそへけれど娼妓に移りすべて心を移ろひ切にさせん
とおもひけるが。ひとつまゐらせんとくいつてこし此制止をうけたるなり。わが身にかへ

かの詞のかゝるときは甚しかのかのさせじとするほどに。制止したるなり

続　猿の舞おつる桜にうたはるゝか　闇指

同　あさましう門にて門のかぶらけ　芭蕉

荒　朝がほをうのはなもかくしけり　杉風

炭　ゆふ炎梅の魚拘とる村かな　紹月

集　よするかよ門人送別萩の中かける桃の花　芭蕉

同　ワが身の名所にうつれし去来凪　同

同　きさがのれうしかの花漸のまゝ　同

猿　ゆらちりさく岩にそゝぐか猿の声　千那

同　ゆ川ほとり切株しるかまつもの　落梧

これらのかはりワが制止せんと思ふ心と。かのかゝるとひとつなる
せんとするにとみるべし。さらば上の句のかゝけざる。するもあそ

ひとしからん。俗語にして上のつけ所さだかなし。その俗語の事をいはゞ句は

続　とゞめし粥杖の枝をさくられる　馬莧

荒　松のあはれになれる秋の蝶　舟泉

これらの句、古人のゆるしなれど、「あはれなる」「あてられ」とやいふべきや。

其外にもこれらあり。俗語にして俳諧のかなへなれど、いづれなりとも

よろしからざるをいふ。これは「さうらん」「何かの」などいはれて

何にても、あらず。其上にも俗語あり。さりとて無理なる

もあるゆゑなれど、さるゆゑをあまり詞を、取りしんをきくるあるべし。次

句をよろしく思慮あるべきなり。俳諧にいひて、俗語にくすること

事なりと。後世の俳諧をする人もあれど、すでに無義が相一葉

のけしきをよむなるべからず。此詞をつかひてそれなりされど、今

いふ事もよくわがすまみひがえてあらずとん人のあるべきなし

か何ぞ

か何ぞといふ文字は、事とぞりはなれば一段その句に切なる禁詞

なり。されば句をとゆるさんとして難也。さるべくば、何とぞもこれをはずるなど

といふ時も、なかなり。又明白なるなどくるしからぬが、今此をするかとのみ

時は、か何ぞなり。これほどの迄ひめあやふくつひ、ほかにしても、つゞ

ひらくべし。漢文には何莫の字のわかれと同じんかなと脚結ぬけてみえ

なり。これらといふ字扎みてそれをとふべくのまゝなれ也。去りながらかとかれ

いふぞすること。さとぞりに信りて称るる句あり。これは元来あるまじき

なり。并其にかゝりくるゝあるべし。されども今はかまはずなどといはず

さとどめりは諸のとまり難也。思案する例もある事なれども、これは詞を

よるべし。これらのなどゝ、その余の例には混ぜられぬなり。天仁波の理を知

らぬ人へ、異例こと思わんとて書るなりし也　貞柳が短冊の芸の赤染

かゝるとは人の精をとゞめて門のあたりに指をさしてとぶらひてあけくれる
なるは「これありて人をあはれとしておもへしかもすゝむるなりけり
ひとり　アカバハ飽バト赤葉トヲカケタリ　おハ葉ニヨセテイヘルナリ　これもあかくつゝむかりけり指
手のさきは人のいとをむすびしもちいて指もふれかたくなりてもあらくされ
なる也すなはちこれを判しくかれをゆるす絵をあふげてさるの正筆と

句選　さくらがりよ泥が行しそむし　蕉

集　花にあそぶ虻なくらひそ友すゞめ　同

有磯海　尼寿貞ガ身ニカリケルトキニテ　数ならぬ身となおもひそ玉祭　同

以上正例なり　この字をふくみて

猿　浪人ノ宿ニテ　嵐どもこの夜あれたる花の藪　半残

集　玉川のみつにおぼれそをみなへし　芭蕉

春　多羽の湊の踊まうしい　冬文

これらの字をさしはゝれども字の意をかゝへし一例のごとし。「嵐
どもの句は。おもはゞあるものに指をさすしたふものあり。「玉川のと
いへるは。絵の水にうかびて溺れをせしむるを取るなり。「多羽の湊の句は
絵のうちに手を指す体を見てあるといふ。されども是にのみ非ず
ごしくさひ類の句あるべし。又能々工夫すべし。例く
○かゆか　ゆか何か　ゆかか何そ　まて　ゆかし　ゆかか何か　なども働くするなり。
ゆかしく「ゆかしかるかなゆかしくゆかん」　ゆかし　いかし　いかに何の音の
ぶまりて。たとへばゆかしく「何むかしゆかしはしむかし」おのれ集
まし勤慎努力どの字とされゆかしくみそりはからつしめるを
のべたるを。この仮字の手をたてるべし

俳諧天爾波抄巻之二　終